

みみタロウ

日本語版 2024年10月 ☆153号

滋賀県国際協会ボランティアグループ「みみタロウ」

住所：大津市におの浜1-1-20 ビアザ淡海2F

Tel : 077-523-5646

E-mail : mimitaro@s-i-a.or.jp

URL : https://www.s-i-a.or.jp

Facebook : https://www.facebook.com/siabiwako



こうして僕は「日野人」になりました！

今回みみタロウは、日野町在住のバス サナヤシ ニサンさんにお話を伺いました。



10歳の時にネパールから日野町に来て10年経ちます。父は20年前に来日し、経営していたカレー店が軌道に乗った頃、僕を呼び寄せてくれました。それまで僕は祖父に育てられていたので父とは2歳の時から、母とは5歳の時から会っていませんでした。日本で親と会った時は不思議な感覚で、しかも全く知らない国でとても心細かったことを覚えています。

学校では、僕は初めて外国から来た生徒だったので、最初先生方は戸惑っている様子でしたが、僕にとっても人生最大のピンチでした。まず困ったのが給食で、日本の粘りのあるご飯が食べられず、しばらく昼に帰宅させてもらっていました。また、ネパールの学校は日本の学校と違って、本での学習ばかりです。ここで初めて音楽や運動などを体験し、図工では「学校で木を切ることがあるんや！」とびっくりするなど新しいことばかりでした。先生にはとても良くしてもらい、学校での僕の様子を母に報告するため、毎週家に来てくれています。友達と喧嘩をした、学校でコーラを飲んだなど、何かあるたびに先生が母に伝え、母からネパール語で怒られるという手順でした。

最初は言葉も全く通じなかったのですが、単語帳で「トイレに行きたい」「帰りたい」などのページを見せて、意思疎通を図っていました。そうした時、学校は僕だけのために日本語教室を開いてくれました。それからは毎日一日中日本語を教えてもらい、僕も友達と遊びたい一心で学びました。少しずつ皆と一緒に勉強ができるようになって、中学に入ると日本語が上手くてびっくりされましたが、それはこの教室のおかげです。そしてもう一つ、地域の人々のおかげでもあります。

両親は毎日、土日も仕事で忙しくしていたので、ここに少し慣れると、僕は一人で自転車で公園に出かけるようになりました。途中、畑仕事をしている近所のお年寄りからよく声をかけてもらい、一時間ほど一緒におしゃべりしていました。「これはカボチャだよ」と言葉を教えてもらったり、「持ってお帰り」と野菜をいただくこともありました。孫のように可愛がってくださるおじいちゃんもいて、一緒ににおにぎりを食べたり、逆立ちや日本語を教えてもらったり、運動会にも見に来てくれたり。当時、僕一人では絶対やっていたいけなかったけど、周りの温かい人々のおかげで、すっかり日野弁を話すようになり、この町が大好きになって、立派な「日野人」になり、ここが故郷になりました。

中学、高校では、野球部に入ると敬語もマスターし、友達も沢山できてとても充実した時を過ごしました。今、自分が外国人と感ずることはありませんが、中学3年生頃から夢を日本語で見るようになり、それがひとつの区切りだったように感じます。家では全てネパール文化なので、僕も完全にネパール人に切り替えます。ただ文化の狭間で困ることもあって、例えば日本の中高生は友達と夜出かけたりしますが、それはネパールでは考えられないことなので、親ともめることもありました。また、私たちはヒンズー教徒で、牛肉は食べません。給食でも別の食事を作ってくれていましたが、そのうち皆と同じ料理で牛肉だけ抜く形になり、それを食べていいのか悩んだこともあります。ですが母から「日本で暮らしていく上では仕方がないから、食べなさい」と言ってもらってからは、神経質になりすぎずに食事をしています。

高校卒業後は、僕は自動車の部品工場で働いています。一方、父がこれまで苦労して経営してきたレストランもあるので、いつか継ぎたいと思っています。ですので、今はしっかり社会勉強をして、人との絆を大切にしながら、将来、父の味のカレー店を滋賀県中に広げたいですね。